

帝王の空間—唐太宗の「帝京篇十首 并序」¹⁾ をめぐって

張 齡 云

京都大学大学院 人間・環境学研究科 共生文明学専攻

〒606-8501 京都市左京区吉田二本松町

要旨 本稿では、唐の太宗の詩作「帝京篇」について論じている。まず、詩における典拠や修辞技法から受けた影響を明らかにしている。その上で、帝王の居所に対する描写のほか、政治の理想としての徳化についても示されている。即ち帝王がいる「空間」——宮殿での行事を初めに描き、最後には封禪の儀式に対する嚮往を示して作品を結んでいる。唐の太宗が作られた「帝京篇」では「帝王」の意識を持った彼の権力の及ぶ空間での行い及び企望が示され、その空間を背景として志を述べている（述志）。この空間と志向は帝王としての身分がなければ経験できるものではない。それは題目の「帝京」——「帝」の「京」と呼応している。

はじめに

漢代には既に、賦の中に都を描写することが習慣となっていた。司馬相如の「子虚賦」, 「上林賦」などが例として挙げられるが、天子の苑囿、宮室、或いは遊獵を主題に、物象の羅列を通して、権力の象徴としての壮美を極力描写している。その上で、綿密な典拠によってその繁華な都を敷衍して描きながら、「勸百賦一」に示されるように、ある程度の寓意性も持たせている。「都城（都）」あるいは「京城」は土地としての存在以上に、人文や政治の中枢であったため、常に文士がそれを主題として創作し吟詠した。時代が唐代になった後は、賦の代わりに「詩」を「京城」を対象として創り始めた²⁾。初唐の詩においては都を描写する作品が少なからず存在し、最初に創作された作品は太宗による「帝京篇」である。太宗は英主として史書に名を残しており、詩や賦は今なお百首余りが伝わり、数の点では初唐の詩人で右に出るものはいない。しかし、注目される理由は創作数のみではない。帝王たる身分でありながら、創作していることも挙げられる³⁾。そのため、太宗の作品に対して、研究者は常にそこに隠れている政

治思想および承継されている文学の伝統を視野に入れて研究する⁴⁾。筆者が重視するのは作品が生じた背景、即ち宮殿——帝王の居所である。また帝王の居所に対する描写のほか、「帝京篇」の第十首には政治の理想としての徳化が示されていることが明らかになる。「帝京篇」を概観すると、二つの要素があると思われる。一つは君権を象徴する空間であり、もう一つは帝王が継承された行事である。「帝京篇」は帝王がいる「空間」——宮殿での行事をはじめに描き、最後には封禪の儀式に嚮往することを示して作品を結んでいる⁵⁾。

本稿では以下の主題に沿って検討したい。「帝王」について文学の伝統が作品に及ぼした影響を遡る一方で、詩における修辭的表現法や文字の用法、すなわち典拠から受けた影響を明らかにしたい。ここでは、南朝の君主の作品を通して、唐の太宗の作品に受け継がれた、典拠の使用についての伝統を探求する。「帝京篇」の研究を通して、唐の太宗の「帝王」としての身分が生み出す書写の姿態を垣間見ることが本稿の目的である。

『全唐詩』の巻頭の詩は唐の太宗による「帝京篇十首并序」である⁶⁾。詩の序文において、太宗

は前朝の帝王が専ら宮室の造営、遊獵を重視していたことに深く感じ、聖王政治の理想に遡ることを望んでいる。

「庶以堯舜之風，盪秦漢之弊，用咸英之曲，變爛漫之音。」

(庶は堯舜の風を以て、秦漢の弊を盪^{はら}い、咸英の曲を用ゐて、爛漫の音を変へん)⁷⁾

堯、舜は聖王の代表者であり、「咸英」の曲も古代の聖王が奏でた「正楽」である⁸⁾。これを見ると、聖王による施政を理想的な典範としていることが理解できる⁹⁾。その上で、秦・漢代帝王の「侈麗(奢侈)」を否定した後、

「故溝洫可悅，何必江海之濱乎。麟閣可玩，何必山陵之間乎。忠良可接，何必海上神仙乎。豐鎬可遊，何必瑤池之上乎。釋實求華，以人從欲，亂於大道，君子恥之，故述帝京篇以明雅志云爾。」

(故に溝洫を悦すべき、何ぞ必ずしも江海の濱をや、麟閣に玩すべき、何ぞ必ずしも山陵の間にや、忠良に接すべき、何ぞ必ずしも海上の神仙にや、豐鎬に遊ぶべき、何ぞ必ずしも瑤池の上にや、実を釈して華を求め、人を以て欲に従はしめば、大道を乱し、君子之を恥じる、故に「帝京篇」を述べ、以て雅志を明らかにするのみと述べている。)

即ち、自ら述べた通り、唐の太宗には既に身近に「喜ぶ」、「弄する」、「接する」、「遊ぶ」人や所があり、遠くに求める必要がないと強調している。その後、更に「釋實求華、以仁從欲、亂於大道、君子恥之」という言葉をもって、「求華(華を求むる)」、「從欲(欲に従ふ)」すべからずと、自分を戒めようとする。そのような「求華(華を求むる)」、「從欲(欲に従ふ)」に対する戒めも、宮室の造営、遊獵に対する反発と呼応する。序文に強調されている、遠遊すべからずという事がこの十首の作品に書き込まれ、王城で年月を経ることを描写する。

まず、この十首の詩の主題を簡単に述べておく。

(1) 宮殿の外観及び生活環境。(2) 心を落ち着かせて向学する姿態。(3) 武宴を開く所での武将による狩獵の鑑賞。(4) 楽館での音楽鑑賞。(5) 宮

中の禁苑での遊賞。(6) 舟を浮かべること。(7) 遊賞後の月色と清楽(清の音楽)の鑑賞。(8) 宴飲の楽しみ。(9) 宮中の美人・妃嬪。(10) 昔の聖王を模範とし、教化した後、封禪の儀式を行いたいという念願。つまり、序文で太宗が遠遊すべからずと強調したことに合わせて、創作に使う視野と経験は自分の暮らしている範囲内になったのだろう。

さて、ここでは「帝京篇」の十首の詩の内容及び典拠によって、帝王がいる空間をめぐる視野と創作への志向を述べる。

一

秦川雄帝宅，秦川 雄たる帝宅。
函谷壯皇居，函谷 壯たる皇居。
綺殿千尋起，綺殿 千尋起ち。
離宮百雉餘，離宮 百雉余り。
連薨遙接漢，連薨 遙かに漢に接し。
飛觀迴凌虛，飛觀 迴かに虚を凌ぐ。
雲日隱層闕，雲日 層闕を隠し。
風煙出綺疏，風煙 綺疏を出す。

第一首では宮殿の在り処を描写し始め、「秦川」と「函谷」という地名を通して宮室の形勢を表示する。前者は天險を表し、後者は関所を示し、地勢の峻険と雄偉とをここに見ることができる。そして、宮殿の華麗さと壮観については「連薨遙接漢(連薨遙かに漢に接し)」、「飛觀迴凌虚(飛觀迴かに虚を凌ぐ)」という詩句によって屋根が銀河や天際と接続するという高遠な勢いを表す。つまり、「帝京篇」の首篇は宮殿の地勢とその華麗さ、帝王がいる居所について述べることによって始まっている。

二

岩廊罷機務，岩廊 機務を罷め。
崇文聊駐輦，崇文 聊か輦を駐む。
玉匣啓龍圖，玉匣 龍圖を啓き。
金繩披鳳篆，金繩 鳳篆を披く。
韋編斷仍續，韋編 断ちて仍 續ぎ。
縹帙舒還卷，縹帙 舒けて還 卷く。
對此乃淹留，此れに對ひて乃ち淹留し。

欽案觀墳典、案に^よ歎りて墳典を觀る。

於茲乃忘倦、茲に於いて乃ち倦むを忘る。

第二首では、太宗は「岩廊」つまり朝廷から「崇文」という所に移動する。そこで魏明帝が設置した「崇文觀」を典例として、帝王の圖書を所蔵する所を強調する。そのほか、「玉匣啓龍圖（玉匣龍圖を啓き）」と「金繩披鳳篆（金繩鳳篆を披く）」の二つの詩句にも故実が見える。「龍圖」とは「河圖」を指し¹⁰、聖人を連想させる言葉である。「玉匣」と「金繩」は単純に貴重な函と繩を指すだけでなく、封禪の儀式的故実にも関わる¹¹。そうした言葉によって自然に帝王としての身分と責任をここで表せる。即ち、詩作における名詞は単に書籍について示すのみならず、典故の内容まで考察すると解釈が得られ、その典故にも多重性が見える。つまり、ここで求知心が高い態度を表すほか、「帝王」たる身分にあって學問を策勵する姿態も表す¹²。太宗は即位後、そうした態度を以て政策を行った。

「太宗初踐祚、即於正殿之左、置弘文館、精選天下文儒、令以本官兼署學士、給以五品珍膳、更日宿直、以聽朝之隙引入內殿、討論墳典、商略政事、或至夜分乃罷、又詔勳賢三品已上子孫為弘文館學生。」

（太宗、初めて踐祚し、即ち正殿の左に於て、弘文館を置く。天下の文儒を精選し、本官を以て兼ねて學士に署せしめ、給するに五品の珍膳を以てし、更日に宿直し、朝を聴く隙に、引きて内殿に入り、墳典を討論し、政事を商略し、或は夜分に至りて乃ち罷む。又、詔して、勳賢三品已上の子孫を弘文館の學生と為す。）¹³

三

移步出詞林、歩を移して詞林を出で、
停輿欣武宴、輿を^{とど}めて武宴を欣ぶ、
雕弓寫明月、雕弓 明月を寫し、
駿馬疑流電、駿馬 疑ふらくは流電かと、
驚雁落虛弦、驚雁 虛弦に落とし、
啼猿悲急箭、啼猿 急箭に悲しむ、
閔賞誠多美、閔賞して誠に美多し、

第三首では武宴を開くことについて述べている。注意すべきは、南朝の梁武帝蕭衍と梁簡文帝蕭綱の間にも「講武宴」について唱和された詩があるということである。まず梁武帝が創作した「宴詩」には、「止殺心自詳、勝殘道未遍…世治非去兵、國安豈忘戰、（殺を止め心自ずから詳し、殘に勝ち道が未だ遍く…世が治まるに兵を去ること非ず、國が安んずるも豈に戰を忘れんや、）」とある¹⁴。これは『論語』子路における「善人為邦百年、亦可以勝殘去殺（善人邦を為むること百年ならば、亦以て殘に勝ち殺を去る可し）」を典拠とする¹⁵。且つ「去兵」については『論語』「顔淵」における孔子と子貢の問答を参照することができる。子貢曰：「必不得已而去、於斯三者何先。」曰「去兵。」（子貢曰く、「必ず已むを得ずして去らば、斯の三者に於て何をか先にせん」と。）曰く、「兵を去らん。」然るに軍武のことは君主の大事であり、それ故梁武帝の詩作がまた「國安豈忘戰」と強調する。しかし簡文帝蕭綱の詩作「和武帝宴詩二首一作和武帝講武宴」¹⁶に軍事演習について述べているほか、末句に「車書今已共、願奏云亭儀（車書今已に共し、願わくば云亭の儀を奏でん）」と書かれた¹⁷。すなわち蕭綱は武帝に進言し、政局をしずめた後封禪の儀式を行うことを勧める。蕭綱は単に蕭衍の功績を褒めすぎているのではなく、君王が天命を受けた後に行うべき「開務之大禮」を強調していると思われる¹⁸。しかし、梁武帝は封禪を念頭に置くにしても、山東の地が既に北魏の領地になっており、泰山に至って封禪の儀式を行うことは不可能である。そこで、会稽の禪国山で封禪の儀式を行うという意見さえも出されるが、著作郎の許懋が封禪に対しての抗弁を力説した結果¹⁹、梁武帝は諫言を受け、議論も止む²⁰。武宴で蕭綱と父帝が創作し唱和した詩中に封禪の語があることを見ると、少しは帝王としての嚮往を理解することができよう。

四

鳴笳臨樂館、笳を鳴し樂館に臨み、
眺聽歡芳節、眺聴いて芳節を欲ぶ、

急管韻朱弦、急管 朱弦を韻し、
 清歌凝白雪、清歌 白雪に凝る。
 彩鳳肅來儀、彩鳳 肅^{つつ}しみて來儀し。
 玄鶴紛成列、玄鶴 紛として列を成す。
 去茲鄭衛聲、茲に鄭衛の声を去らしめ、
 雅音方可悅、雅音方に悦ぶべし。

第四首では、楽館での音楽鑑賞を描写している。ここで描かれる音楽の種類は「清歌」、「白雪」という高雅な音楽である。「彩鳳肅來儀、玄鶴紛成列（彩鳳肅しみて來儀し、玄鶴紛らわしくして列を成す）」と、盛世を象徴する鳳凰と、師曠（琴の名手）に関わる音楽の靈妙を表す典拠を示す²¹⁾。注意すべきは、『韓非子』によると、師曠は「亡国の音」を識別することができるということであり、晋の平公が、異なる声調で演奏し、特に「清徵」の曲調を聴きたがったとき、師曠は「徳のある君主のみが聴けるのです」と述べたが、平公が懇願したのでやむを得ず弾くと、其の後玄鶴が飛んで来て列をなして踊ったということである。そう考えると、太宗の詩作に書かれた「玄鶴」も徳のある君主が聴く曲を暗示する。それ故、作品の末句に「去茲鄭衛聲、雅音方可悅（茲に鄭衛の声を去らしめば、雅音方に悦ぶべき）」²²⁾と注意を喚起し、また音楽について「正声」を強調している。

五

芳辰追逸趣、芳辰 逸趣に追ひ、
 禁苑信多奇、禁苑 信^{まこと}に奇多し。
 橋形通漢上、橋の形 漢^{さん}の上と通じ、
 峰勢接雲危、峰の勢^{こも}ひ 雲に接すほど危し。
 煙霞交隱映、煙霞 交^{こも}ごも隠映し、
 花鳥自參差、花鳥 自^{おのづ}から參差たり、
 何如肆轍跡、何如に轍跡を肆^{つか}ねようと、
 萬里賞瑤池、万里 瑤池を賞でようか。

第五首では、宮中の禁苑で遊賞したとき、禁苑で見た「橋形」、「峰勢」、「煙霞」、「花鳥」に妙な所があると思ったという印象を述べている。末句で反問する方式で、周穆王のように万里の西征で瑤池に行きはしないと述べている。

六

飛蓋去芳園、飛蓋 芳園に去り、
 蘭橈游翠渚、蘭橈で翠渚に遊ぶ。
 萍間日彩亂、萍間に 日彩乱れ、
 荷處香風舉、荷の処に 香風を挙す。
 桂楫滿中川、桂楫 中川に満ち、
 弦歌振長嶼、弦歌 長嶼に振ふ。
 豈必汾河曲、豈に必ずしも汾河の曲^{わが}ならんや、
 方為歡宴所、方に歡宴の所と為す。

第六首では、園囿で舟を浮かべるという趣味が描写される。ここでの「蘭橈」、「桂楫」は『楚辞』に典拠を持つといえる。その詩語も梁簡文帝蕭綱の樂府詩の「採蓮曲」にも見える。

桂楫蘭橈浮碧水、江花玉面兩相似、蓮疏藕折香風起、香風起、白日低、採蓮曲、使君迷。²³⁾

(桂楫蘭橈 碧水に浮かびて、江花玉面兩相似たり、蓮疏して藕折りて香風起る、香風起りて、白日低し、採蓮曲、君をして迷わしむ。)

ここで述べられている蓮の花が植えられた湖面で舟を浮かべるという楽しみは中国南方特有の趣味であり、北方の閩隴貴族出身の太宗はこの場面を想像できないかもしれない。南朝で流行した「采蓮曲」を題材としての詩作では主に景物及び女性が蓮の花を摘む行為が描かれたが²⁴⁾、その詩作は湖面の景色を通して宮庭で舟を浮かべる楽しみをあらわし、南朝樂府詩の描写方式を模倣していると考えられる。末句は「豈必汾河曲、方為歡宴所（豈に必ずしも汾河の曲ならんや、方に歡宴の所と為す）」という反問で結んでいる。そこで漢の武帝が河東に行幸し后土を祭祀したという故実を示す²⁵⁾。歴史にかかわる典拠を使うほか、序文における「逡遊すべからず」という理念と呼応している。宮殿が長安に位置するにもかかわらず、舟を浮かべ遊賞できる環境は南方のイメージである。それが太宗の創作意識を通して南朝樂府の「清麗」の格調から「節制」の詩風に変わる²⁶⁾。

七

落日雙闕昏、落日 双闕昏く、
 回輿九重暮、輿を回し九重暮る。
 長煙散初碧、長煙、初の碧に散じ、
 皎月澄輕素、皎月、輕素に澄む、
 牽幌玩琴書、幌を牽げ、琴書を玩び、
 開軒引雲霧、軒を開けて雲霧を引く、
 斜漢耿層閣、斜漢 層閣を耿し、
 清風搖玉樹、清風 玉樹を揺るがす、

第七首では月色と琴書の鑑賞について述べており、『唐詩鏡』ではこの詩に対して以下のように評論している、

太宗麗色、來自齊梁蒼骨、本之隋氏、「長煙散初碧、皎月澄輕素」、語藻而潔²⁷⁾。(太宗麗色、齊梁の蒼骨に自り來たり、之を隋氏に本づく、「長煙初の碧に散じ、皎月輕素に澄む」、語藻ありて潔し、)

前述した六首の詩作で描かれた公的な空間と異なり、この作品は個人的な空間で、自身の雅趣により月景を鑑賞しながら抒情している。創作した詩を見ると、「斜漢耿層閣（斜漢層閣を耿し）」という詩句は、謝朓が作った「離夜同江丞王常侍作」における「斜漢耿層臺（斜漢層臺を耿す）」に類似しており、太宗が南朝の詩作に学んでいることが知られる。ほかには、末句の「清風搖玉樹（清風玉樹を揺るがす）」における、「玉樹」に関わる典故が少なくなく、多くは漢代の宮廷と漢の武帝に関連がある。すなわち、作品において宮殿を描くのに使われた詩語も、古人の創作に擬えられたものなのである、

八

歡樂難再逢、歡樂 再び逢ひ難く、
 芳辰良可惜、芳辰 良に惜しむ可し、
 玉酒泛雲鬢、玉酒 雲鬢に泛かび、
 蘭麝陳綺席、蘭麝 綺席に陳ぬ、
 千鍾合堯禹、千鍾 堯禹に合ひ、
 百獸諧金石、百獸 金石に諧ふ、
 得志重寸陰、志を得て寸陰を重んじ、
 忘懷輕尺璧、懷を忘れ尺璧を軽んず、

第八首では宴飲の楽しみを述べている。宴席を設けた理由は「芳辰良可惜 芳辰（良に惜しむ可し）」、吉日を無駄に費やさないために、そのすばらしいときに宴席を開いたのである。詩作に描かれたものには「玉酒」、「蘭麝」のような美食のほか、「千鍾」²⁸⁾を酌み交わすことや、「百獸」が「金石」の楽をあわせて舞うほどの喜びなどがある。しかし、最後には忘れずに自分に注意を促す、「得志重寸陰、忘懷輕尺璧。（志を得て寸陰を重んじ、懷を忘れ尺璧を軽んず、）」吉日を大切にしてお宴席を開いたにもかかわらず、理性によって自分を戒慎し、志を遂げた後は、寸暇を惜しもうというのである、

九

建章歡賞夕、建章 歡びて夕べを賞で、
 二八盡妖妍、二八 盡く妖妍たり、
 羅綺昭陽殿、羅綺あり、昭陽の殿、
 芬芳玳瑁筵、芬芳あり、玳瑁の筵、
 珮移星正動、珮 移りて 星正に動き、
 扇掩月初圓、扇 掩ひて 月初めて圓くす、
 無勞上懸圃、勞して懸圃に上ること無くも、
 即此對神仙、即ち、神仙に對かふがごとし、

第九首では、妃嬪の美しさを述べている。ここで太宗は漢代の宮殿である建章宮、昭陽殿を引用する。建章宮は武帝の太初元年に建てられ、昭陽殿は成帝の皇后である趙飛燕と妹が居住した場所である²⁹⁾。すなわち、人世にありながら仙境のごとき美しさを感じていることを典拠によって表すために漢代の宮殿及び妃嬪を引いたのである。そのような美人がいるので、周穆王のように懸圃という仙境には行かないのである、

十

以茲游觀極、茲を以て游觀極まり、
 悠然獨長想、悠然として独り長想す、
 披卷覽前蹤、卷を披きて前蹤を覽、
 撫躬尋既往、躬を撫でて既往を尋ぬ、
 望古茅茨約、古の茅茨の約やかなるを望み、
 瞻今蘭殿廣、今の蘭殿廣きを瞻る、
 人道惡高危、人道 高危を惡み、

虚心戒盈溢、虚心にして 盈溢を^{いまし}戒む、
 奉天竭誠敬、天を奉じて誠敬を^つ竭くし、
 臨民思惠養、民に臨みて惠養を思ふ、
 納善察忠諫、善を納め 忠諫を察し、
 明科慎刑賞、科を明らかにして刑賞を慎む、
 六五誠難繼、六五 誠に繼ぐこと難く、
 四三非易仰、四三 仰ぐこと易きに非ず、
 廣待淳化敷、^は廣く淳化の敷かるを待ち、
 方嗣云亭響、^は方に云亭の響きを嗣が^つん。

第十首はそれまでの詩篇を総括している。権力の頂点に立ち全てを所有した後、次のような考え方が浮き上がる。「望古茅茨約、瞻今蘭殿廣（古の茅茨約やかなるを望み、今の蘭殿の廣しを瞻る）」。「茅茨」とは古に堯が住んだ簡朴な居所を指す。それと今住んでいる宮殿と比較することは今昔の対照をあらわす。「茅茨」も儉約の意味に加え、聖王に比擬する意義があると思われる。儉約的であることに加え、太宗はすなおに諫を受け入れ、刑賞を明らかにするよう注意を促している。最後に謙った態度を以て次のように自分の志を表す。「六五誠難繼、四三非易仰（六五誠に繼ぐこと難く、仰ぐこと易く非ず）」³⁰。聖王の道を遵守することが容易ではないことを知るからこそ、最終的に「廣待淳化敷（広く淳化の敷かるを待ち）」その後、初めて封禪の伝統を継承することができるとしたのである。実は、太宗は一生かけてこの理想に達することができるように力を尽くしている。例を挙げると、貞觀二十二年詔を下して玉華宮を建築した時、正殿の屋根のみを瓦で覆い、他の所を茅で覆えと要求された。以て簡素さを求め、聖王の先例に従ったのだ。

正殿瓦覆、餘皆葺之以茅、意在清涼、務從儉約、…至〔貞觀〕二十二年四月二十四日、太宗以新造離宮、務從卑儉、終費人力、謂侍臣曰、「唐堯茅茨不翦、以為儉德、不知堯之時、無瓦為蓋、桀紂之為、若於無瓦之晨、為茅茨者、未為儉德、不翦之言、蓋書史粉飾之耳、朕今構采椽于椒風之日、立茅茨于有瓦之時、將為節儉、自當不謝古者。」³¹
 （正殿瓦にて覆ひ、余るところ、皆之を葺く

に茅を以てし、意、清涼に在り、務めて儉約に従う。…〔貞觀〕二十二年四月二十四日に至り、太宗は離宮を新造するを以て、務めて卑儉に従うも、終に人力を費やす。侍臣に謂ひて曰く、「唐堯茅茨を翦らず、以て儉德と為す。堯の時、瓦、蓋となすこと無しと知らず。桀紂の為なり、若し、瓦無きの晨に於いて茅茨を為すものは、未だ儉德と為さず。不翦之言、蓋し書史之を粉飾するのみ。朕は今椒風の日に於いて采椽を構へ、瓦有る時に於いて茅茨を立て、將に節儉を為し、自ずから當に古者に謝らざるべし。」…）（王溥『唐會要』卷30.）

「務從儉約（務めて儉約に従ふべし）」と要求されたのに、最終「終費人力（終に人力を費やす）」となった。玉華宮が建築されたことをめぐる議論も少なくなく、特に太宗に頻繁に民を使役しないことを諫言した³²。その議論に対して、太宗は次のように反論している。唐堯の時代には瓦が未だなかったので、堯の居所が茅茨で屋根を覆うのは当然なことである。そう考えると、史書に書かれている「不翦」という言葉は単に粉飾するためではないか³³。然るに太宗が述べるように、瓦があるのにこれで屋根を覆わず、代わりに茅茨を選んで葺くことは自主的（自覚的）な「儉約」であり、上古の堯・舜よりさらに戒慎しようと意識しているのである。つまり、唐代に瓦がなかったにもかかわらず、先王の道を守ろうと意識していることは、太宗自身が古人に勝るとも劣らないと思っ

ているからである。
 しかし、たとえ「帝京篇」の内容が帝王の慎み深い行い、及び古の聖王を模範として追踵したいという気持ちを表しているとしても、我々は太宗が帝位を取った際の非常手段を無視することはいできない、いわゆる玄武門の変である³⁴。史書によると、政変を決定したときの様子について、以下の記載がある。

太宗遲疑未決、衆又曰「大王以舜為何如人也。」曰「浚哲文明、溫恭允塞、為子孝、為君聖、焉可議之乎。」府僚曰「向使舜浚井不

出、自同魚鱉之斃、焉得為孝子乎。塗廩不下、便成煨燼之餘、焉得為聖君乎。小杖受、大杖避、良有以也。」太宗於是定計誅建成及元吉。³⁵¹

(太宗遲疑未だ決せず、衆又曰く「大王舜を以て如何なる人と為すや。」と、曰く「睿哲文明、溫恭允塞、子と為すは孝なり、君と為すは聖なり、焉くんぞ之を議すべきか。」府僚曰く「もし舜井を浚ひて出でざれば、自ずから魚鱉の斃すと同じ、焉くんぞ孝子と為すことを得んか。廩を塗りて下らざれば、すなわち煨燼の余りと成し、焉くんぞ聖君と為すことを得んか。小杖を受け、大杖を避け、良にゆえん有るなり。」太宗是に於いて計を定めて建成及び元吉を誅す。)(『旧唐書』巻64、巢王元吉傳。)

最終的に太宗と部下は「聖王」の故実を以て政変を起こさざるを得なくなった。政変を決断した際、部下の質問に対して、太宗の舜についての認識を答えられ、聖王の事例を熟知していることがわかる。史書が編纂された際、この対話が収録された理由は、太宗が聖王を追踵しているというイメージ作りであり、政変の合理性を表そうとしてはないだろうか。しかし政争中に殺された兄弟に対して、太宗は彼らを罪人と同列に扱ったのである³⁶¹。

『旧唐書』には、以下のように記載されている。

〔貞觀十六年〕夏六月辛卯、詔復隱王建成曰隱太子、改封海陵刺王元吉曰巢刺王。(『舊唐書』巻3、太宗本紀。)

(夏六月辛卯、詔りをして隱王建成を復して隱太子と曰い、改めて海陵刺王元吉を封じて巢刺王と曰う。)

太宗即位、追封建成為息王、諡曰隱、以禮改葬、…十六年五月、又追贈皇太子、諡仍依舊。(『舊唐書』巻64、隱太子建成傳。)

(太宗位に即して、建成を追封して息王と為す、諡して隱と曰い、禮を以て改葬して…十六年五月、又皇太子に追贈して、諡なお旧

に依る。)

最近の論文である「跋唐隱太子李建成及妃鄭觀音墓誌」には、出土した隱太子墓誌に載せてある内容は、わずか六十字程度のものであると述べられている。

大唐故息隱王墓誌

王諱建成、武德九年六/月四日薨於京師、粵以/貞觀二年歲次戊子正/月己酉朔十三日辛酉/葬於雍州長安縣之高/陽原。³⁷¹

(王の諱は建成、武德九年六月四日京師に於いて薨ず、粵を以て貞觀二年歲次戊子、正月己酉朔、十三日辛酉、雍州長安縣の高陽原に於いて葬る。)

その後、殺された隱太子は高陽原で葬られた。元太子は死後罪人のように扱われ、高祖皇帝が葬られた「獻陵」に陪葬されることができなかった³⁸¹。

つまり、「帝京篇」の十首の詩は「帝王」という身分を持っている人間のみが経験できることを表している。そう考えると、太宗は終生「明君」、「聖王」を目標として、そのように称される人間としてふさわしくなろうと希望している。最終的には聖王の跡を継承し、封禪の儀式を通して帝位の正統性を表そうとする。それらは太宗が非常手段により即位した後一生かけて極力努めていた汚名返上の手段だと言えるのではないだろうか。

おわりに

「帝京篇」の十首の詩は、「遠遊すべからず」という意識に沿って、宮殿の形勢を初めに描き、最後は聖王を模範として封禪に対する嚮往を表すことによって結んでいる。「帝京篇」の内容は主に帝王の視野と経歴をめぐって描かれる故、空間の描写が故実と現実が交錯したものになる傾向があると思われる。唐の太宗にとって、自身は君臨する都城の所有者であり、宮殿という空間で行われる宴会、読書、遊覧、更に後宮の妃嬪との面会も、「帝王」という身分を持っている彼のみが経験す

ることができる。そして、詩作で書かれた詩語が具体的に太宗の欲望を表現していなくても、我々は文字の中に隠された意識を推察することができる。この隠され、顕されない意識は常に詩作の末尾を自身を戒慎する詩語を使って結ぶことによって表現され、最終第十篇においては「曲終奏雅（曲終りて雅を奏す）」という詩風を通して自分の意識を高め、「徳君」の境地に至る³⁹⁾。これは唐の太宗が即位した後の「帝王」たる自身への希望のみではなく、儒家の道統における「聖主」、「明君」であることへの期待によって生まれる意識といえるかもしれない⁴⁰⁾。

さらに序文における「釋實求華（実を釈して華を求め）」にも表れているが、太宗の意見はそれと対照的なものである。「比見前、後『漢史』載録揚雄「甘泉」、「羽獵」、司馬相如「子虛」、「上林」、班固「兩都」等賦、此既文體浮華、無益勸誡、…（前後漢史をならべて見ると、揚雄の甘泉・羽獵、司馬相如の子虚・上林、班固の兩都等の賦が載録されている。それらの文体は浮華にして、勸誡するにも無益である。）」⁴¹⁾太宗の賦に対する批評が多少は理解できる。その上で「詩言志」の伝統から考えると、詩を創作することで志を述べることは適当である。即ち、単なる空間の描写ではなく、空間を背景として志を述べている作品だといえる。前述したように、詩作に描かれた空間と志向は帝王としての身分がなければ経験できるものではない。そう考えると、太宗が作られた「帝京篇」が強調するのは「帝」の「京」であるということだろう。そして深く作品の創作意図に思いを巡らせると、「封禪」が最終的な嚮往の対象であるということは、君主たる太宗が帝位の「正統」性を強調するためといえるのではないだろうか。しかし、封禪の儀式に対する企望の念を抱いていたにもかかわらず、太宗は封禪の儀式を一生涯実行しなかった⁴²⁾。

初唐に創作した京城を題材としての詩作において、本稿は唐の太宗が作られた「帝京篇」における「帝王」が権力を及ぼす空間での行い及び企望について論じている。将来はそのほかの京城を描写する作品に対する研究も行いたい、それによって異なる京城の空間イメージを示したいのである。

注

- 1) 「帝京篇」についての論文は、種村由季子「二つの『帝京篇』——唐太宗と駱賓王」(『中國學會論集』第39号、2010年)、同「駱賓王『帝京篇』と則天武後の洛陽駐蹕」(『日本中国学会報』第64集、2012年)、何雅雯「多重的城市：關於初唐幾首帝京詩作」(『中國學報』、韓國中國學會、2014年)がある。
- 2) 宇文所安(Stephen Owen)は、京城詩について、「京城詩產生自兩種文學傳統、較早的一種傳統起源於東漢的京城賦。這些京城賦對長安的處理方式、對於理解唐代寫給當代讀者看的京城詩具有重要意義。…第二類重要的傳統派生於京城賦、開始於鮑照的「蕪城賦」、發展成古蹟詠懷詩。(京城詩は二種類の文学の伝統から生まれている。早い方の伝統は後漢の京城賦に起源を持つ。京城賦において長安を対象とするときの書き方を知ることは、唐代の読者のために創作された京城詩を理解する際に重要な意義がある。…二つの重要な伝統も京城賦から派生し、鮑照の「蕪城賦」に始まり、古蹟詠懷詩へと発展している。)」と論じている。(賈晉華訳、『初唐詩』、聯經出版社、台北、2007年、115-116頁)
- 3) 吳雲、龔宇『唐太宗集』(陝西人民出版社、1986年)の統計によれば、唐の太宗の詩作は105首があり、賦が5篇ある。本稿における太宗の作品は、新たに出版された『唐太宗全集校注』(天津古籍出版社、2004年)を底本とした。
- 4) 唐の太宗が持っていた「帝王」の身分と詩作に関する研究については、陳晉嘉『唐太宗帝王身份與其詩歌觀點及創作間關係之研究』(國立台灣師範大學碩士論文、2007年)が参考になる。
- 5) 唐の太宗の作品に対して最も詳しい研究成果が著されているのはJack W. Chen, *The Poetics of Sovereignty: On Emperor Taizong of the Tang Dynasty*, Harvard Asia Center, 2010である。田曉菲はその「書評」において、「本書第六章と第七章分別討論君權的空間象徵——宮殿、以及君權的時間象徵——儀式。特別是具有重大政治文化意義的封禪儀式。(本書の第六章と第七章では、それぞれ君權を象徵する空間——宮殿、及び君權を象徵する時間——儀式、特に重要な政治文化的意義を持つ封禪の儀式について論じている。)」と述べている。(『中國文哲研究集刊』第38期所収、2011年3月、305頁)第六章の主題は賦文を通しての宮殿の描写である。第七章では「帝京篇」の連篇詩について論じる他、君權を象徵する儀式——封禪を通して詩作について解釈している。そして、筆者も太宗が上古の聖王及び封禪に追慕の念を感じていることに注目する故、Jack W. Chenの論点を引用している。
- 6) 『全唐詩』第一冊(中華書局、2008年、頁1)参照。
- 7) 本稿での「帝京篇」に関する訓読の部分は種村由季子「二つの『帝京篇』——唐太宗と駱賓王」(『中國文學論集』、39号、2010年)を参照。

- 8) 「威」は堯が作った楽曲といわれ、「英」は帝嚳が作った楽曲といわれる。「帝京篇」序の注釈16(『唐太宗全集校注』、4頁)参照。
- 9) 初唐における君主たちが上古の聖王を推賞する心理はどのように生み出されたのかについて、特に唐の太宗が古代の聖王を追慕する心理状態に関する論説は、廖宜方『唐代的歴史記憶』(國立臺灣大學出版中心、2011年)第一章第一節が参考になる。
- 10) 「龍圖」は河図の別称、『唐太宗全集校注』7頁を参照。
- 11) 「金繩」は封禪の儀を行う際に玉簡を蔵する玉匣に纏わせるために用いたものを指す。
『唐太宗全集校注』7頁を参照。これに関する出典もある。「或曰封者、金泥銀繩、或曰石泥金繩、封之印璽也。」(『白虎通』卷五)「然神經怪牒、玉策金繩、闕局於明靈之府、封牒於瑤壇之上者、靡得而闕也。」(『後漢書』卷82上、方術列傳序。)「披金繩而握天鏡、開玉匣而總地維。」(『南齊書』卷1、高帝紀上)
- 12) 唐の太宗は即位する以前にも既に知識の吸収を重視していた。しかし、それは尚武の氣風を持っている關隴集團出身貴族の主流文化ではない。帝位に就いた後、太宗は更に歴史に範を求める學習を重視する。これについては、廖宜方『唐代的歴史記憶』(國立臺灣大學出版中心、2011年、第一章第一節、60-65頁)を参照。
- 13) 吳兢撰、謝保成集校『貞觀政要集校』(中華書局、2003年)卷七「崇儒學」第二十七、375頁。書き下文は新釈漢文大系96『貞觀政要下』(明治書院、1979年、549頁)による。
- 14) 遼欽立輯校『先秦漢魏晉南北朝詩中』(學海出版社、台北、1991年、1528頁)。
- 15) 前掲注5。田曉非はThe Poetics of Sovereignty: On Emperor Taizong of the Tang Dynasty に対する「書評」においてもこの詩作について指摘している。頁305を参照。
- 16) 遼欽立輯校『先秦漢魏晉南北朝詩中』(學海出版社、台北、1991年、1930-1931頁)。
- 17) 管仲曰、「古者封泰山禪梁父者七十二家、而夷吾所記者十有二焉。昔無懷氏封泰山、禪云云、虞羲封泰山、禪云云、神農封泰山、禪云云、炎帝封泰山、禪云云、黃帝封泰山、禪亭亭。」(『史記』卷二十八、封禪書)。
- 18) 是故王者初基、則有封禪之事。蓋以其成功告於神明者也。夫東方者、萬物之所始、山嶽者、靈氣之所宅、故求之物本、必於其始、取其所通、必於所宅、崇其壇場、則謂之封、明其代興、則謂之禪。然則封禪者、王者開務之大禮也。德不周洽、不得輒議斯事、功不弘濟、不得勞勳斯禮。…(袁宏『後漢紀』卷八、光武皇帝紀)。
- 19) 時有諸封會稽禪國山者、高祖雅好禮、因集儒學之士、草封禪儀、將欲行焉、慙以為不可、因建議曰、「臣案舜幸岱宗、是為巡狩、而鄭引孝經鉤決云、封于泰山、考績柴燎、禪乎梁甫、刻石紀號。此緯書之曲說、非正經之通義也。」(『梁書』卷四十、許懋傳)。
- 20) 前掲注19。「高祖嘉納之、因推演慈議、稱制旨以答、請者由是遂停。」
- 21) 乃召師涓、令坐師曠之旁、援琴鼓之。未終、師曠撫止之、曰:此亡國之聲、不可遂也。(晉)平公曰、「此道奚出。」師曠曰、「此師延之所作、與紂為靡靡之樂也。及武王伐紂、師延東走、至於濮水而自投、故聞此聲者必於濮水之上、先聞此聲者其國必削、不可遂。」平公曰、「寡人所好者音也、子其使遂之。」師涓鼓之。」平公問師曠曰、「此所謂何聲也。」師曠曰、「此所謂清商也。」公曰、「清商固最悲乎。」師曠曰、「不如清徵。」公曰、「清徵可得而聞乎。」師曠曰、「不可、古之聽清徵者皆有德義之君也、今吾君德薄、不足以聽。」平公曰、「寡人之所好者音也、願試聽之。」師曠不得已、援琴而鼓、一奏之、有玄鶴二八、道南方來、集於郎門之堦、再奏之而列、三奏之、延頸而鳴、舒翼而舞。(『韓非子』卷三、十過)。
- 22) 趙小華「雅正:唐太宗禮樂文化觀和文學思想的核心」(『文史哲』2007年、第299期)。
- 23) 遼欽立輯校『先秦漢魏晉南北朝詩下』(學海出版社、台北、1991年、1925頁)を参照。Jack W. Chen., The Poetics of Sovereignty: On Emperor Taizong of the Tang Dynasty. (Cambridge, MA: Harvard Asia Center, 2010)もこの詩作を指摘している。369頁を参照
- 24) 余香順「中國文學中的採蓮主題研究」(『南京師範大學文學學院學報』、第4期、2002年、10頁)を参照。
- 25) 上行幸河東、祠后土、顧視帝京欣然、中流與群臣飲燕、上歡甚、乃自作秋風辭曰、「秋風起兮白雲飛、草木黃落兮雁南歸。蘭有秀兮菊有芳、攜佳人兮不能忘。泛樓船兮濟汾河、橫中流兮揚素波。簫鼓鳴兮聳棹歌、歡樂極兮哀情多。少壯幾時兮奈老何。」(『文選』卷45、「秋風辭并序」)。
- 26) 余香順氏は二つの要点を指摘している。まず、北方にある宮庭、園林で遊を植えることは隋・唐時代で盛んに行われており、私人の別荘及び皇室の園林にしばしば見ることができること。(前掲注24の論文11頁を参照)。なお、「則是採蓮歌曲也隨著清樂的流行而傳入北方。葛曉音先生の論文「盛唐清樂的衰落和古樂府詩的興盛」即有如下的論述:採蓮之事風向天下、正是北人傾慕江南文化一個典型例證。因採蓮而產生大量「麗什」「情詩」。原是南朝清商樂府的主要特色、如今也隨著採蓮之風遍及全國。(採蓮曲も清樂の流行に従い北方に伝わった。葛曉音氏の論文である「盛唐清樂的衰落和古樂府詩的興盛」に以下のように述べられている。「採蓮」が一世を風靡したことは、北方人が江南文化に傾慕した一つの典型的な例証である。「採蓮」という行いは多くの「佳麗な文章」や「情詩」を生み出す。元々はそれは南朝の清商樂府の主要な特色であるが、今も「採蓮」の流行に乗って全国に普及している)」と述べている。(前掲余香順の論文12頁を参照)。
- 27) 陸時雍『唐詩鏡』卷一、初唐第一。(王雲五編『四庫全書珍本』364冊に収入、臺灣商務印書館、

- 1971年、三業表)。
- 28) 『孔叢子』儒服から出典している。「堯舜千鍾、孔子百觚。」長澤規矩也編『和刻本諸子大成第一輯』(汲古書院、1975年、504頁)を参照。
- 29) 成帝趙皇后居昭陽殿、號飛燕以其體輕也有女弟、俱爲婕妤、貴傾後宮。(『三輔黃圖』卷之三)。
- 30) 六五」は六王(夏禹、商湯、周武王、周成王、周康王、周穆王)、五帝(黃帝、顓頊、帝嚳、帝堯、帝舜)を指す。「四三」は四王(夏禹、商湯、周文王、周武王)、三王(夏禹、商湯、周文王)を指す。『唐太宗全集校注』(天津古籍出版社、2004年、14頁)を参照。
- 31) この内容は次の点校本を参照。『唐會要上』(上海古籍出版社、1991年、647頁)、牛繼清『唐會要校證』(西安三秦出版社、2012年、478-479頁)。両書は「武英殿聚珍版叢書」系統の江蘇書局本(清光緒年間刊)を底本に、上海圖書館所藏四種の抄本による校訂や、ほかの史書との対校を行って成立しているものである。筆者も『文淵閣四庫全書』(臺灣商務印書館、1983年、第606冊、413頁)を参照。その内容は次のように記載されている。「至二十二年四月二時四日、太宗以新造離宮、務從卑儉、終費人力、謂侍臣曰、唐堯茅茨不剪、以為儉德、不知堯之時無瓦、不得不以茅茨、則於無瓦之晨為茅茨者、未為儉德。不剪之言、蓋書史粉飾之耳。朕今構采椽于椒風之日、立茅茨于有瓦之時、將為節儉、自當不謝古者……」(句読点は筆者がつけた。)下線に当たる箇所は点校本に記載されている原文と異なる。文淵閣四庫全書本には「無瓦為蓋」「桀紂之為」という句がないほか、点校本にない「不得不以茅茨」が載せてある。その語句について、上海古籍出版社本は次のように句読点が付いている。「不知堯之時、無瓦為蓋；桀、紂之為、若於無瓦之晨、為茅茨者、未為儉德。」『唐會要校證』の句読点「不知堯之時、無瓦為蓋、桀、紂之為、若於無瓦之晨、為茅茨者、未為儉德。」も上海古籍出版社本とほぼ一致している。文淵閣四庫全書本の原文は点校本と異なる処があるにもかかわらず、文脈を考える上で、筆者は次のように句読点を付けた。「則於無瓦之晨為茅茨者、未為儉德。(即ち瓦無きの晨に於いて茅茨を為すものは、未だ儉德と為さず。)」両方の句読点を付ける方式と文脈を考えると、文淵閣四庫全書本に異なる箇所があるものの、語句を理解するには四庫全書本の原文が良いと考える。それ故、『唐會要』の原文は『唐會要校證』に拠り、訓読の部分は四庫全書本の内容に基づいている。
- 32) 充容徐氏は諫めた。『貞觀政要』巻9(吳兢撰、謝保成集校『貞觀政要集校』、492-494頁)、『舊唐書』巻51を参照。
- 33) 『韓非子』「五蠹」から出典している。「堯之王天下也、茅茨不剪、采椽不斲。」長澤規矩也編『和刻本諸子大成第五輯』(汲古書院、1975年、431頁)を参照。
- 34) 玄武門の変に関する研究は、李樹桐「初唐宗室間相互關係的演變」、「玄武門之變及其對政治的

影響」(『唐史考辨』所収、[旧]台北中華書局、1965年)を参照。李樹桐氏は『通鑑』などの史料を引用して、唐の太宗が史官の記載に介入し、玄武門の変の原因を自己に対して有利な方向に導いたと推論している。『唐楊文幹反辭連太子建成考略』(『唐史考辨』所収、[旧]台北中華書局、1965年、114-117頁)を参照。『通鑑』には以下のように記載されている。

『通鑑』巻197、貞觀十七年七月條。

初、上謂監修國史房玄齡曰、「前世史官所記、皆不令人主見之、何也。」對曰、「史官不虛美、不隱惡、若人主見之必怒、故不敢獻也。」上曰、「朕之為心、異於前世帝王、欲自觀國史、知前日之惡、為後來之戒、公可撰次以聞。」諫議大夫陳子齊上言、「陛下聖德在躬、舉無過事、史官所述、義歸盡善、陛下獨覽『起居』、於事無失、若以此法傳示子孫、竊恐曾、玄之後或非上智、飾非護短、史官必不免刑誅、如此、則莫不希風順旨、全身遠害、悠悠千載、何所信乎、所以前代不觀、蓋為此也。」上不從。玄齡乃與給事中許敬宗等刪為『高祖』、『今上實錄』。癸巳、書成、上之。上見書六月四日事、語多微隱、謂玄齡曰、「昔周公誅管、蔡以安周、季友錫叔牙以存魯、朕之所以、亦類是耳、史官何諱焉。」即命削去浮詞、直書其事。

皇帝は國史を閲覽すべきではない、これが臣下が太宗に対して奏上した諫言である。房玄齡と許敬宗は太宗の要望を受けて、『實錄』を編纂し奏上した。しかし太宗は「六月四日事(玄武門の変)」について意見があり、「命削去浮詞、直書其事」という箇所を見ると、太宗が史官の編纂過程に介入したことがわかる。そして李樹桐氏も直言している。「高祖太宗實錄修成以後、太子建成和楊文幹同反似已成爲定案、五代時劉昫作舊唐書、宋歐陽修作新唐書均採其說、司馬光作資治通鑑仍採實錄舊說、其他如唐鑑(范祖禹撰)等書、莫不依據是說;…(高祖・太宗により『實錄』が修成されて以降、皇太子李建成と楊文幹が共に謀反したことは定説となった。五代の劉昫が『旧唐書』、宋の歐陽修が『新唐書』を編纂したときも共にこの論点を採用した。司馬光が『資治通鑑』を作った際も『實錄』の説を採用した。ほかの史書、例えば『唐鑑』(范祖禹撰)なども、例外なしに莫この論点を採用した…)」(同掲書、117頁)。李樹桐氏の立場では、唐代史料を記載する史書は全て許敬宗が太宗の意見を受けて編纂した『實錄』の史料を採用した故、玄武門の変の真実を反映することができないと考える。なお、布目潮風『隋唐史研究——唐朝政權の形成』(東洋史研究會、1968年)下篇第二章と第三章では、「玄武門の変」に関する詳しい論説がある。

- 35) 『旧唐書』巻64集王元吉傳、そして『新唐書』巻105長孫無忌傳においては、長孫無忌の建言を明記している。「皇太子建成毒王、王病、舉府危駭、房玄齡謂無忌曰、禍隙已牙、敗不旋踵矣、夫就大計者遺細行、周公所以細管、蔡也、遂俱

入白王，請先事誅之，王未許。無忌曰：大王以舜何如人。

- 36) 建成死時年三十八，長子太原王承宗早卒，次子安陸王承道，河東王承德，武安王承訓，汝南王承明，鉅鹿王承義並坐誅，太宗即位，追封建成為息王，諡曰隱，以禮改葬，葬日，太宗於宣秋門哭之甚哀，仍以皇子趙王福為建成嗣，十六年五月，又追贈皇太子，諡仍依舊。（『舊唐書』卷64，隱太子建成傳）
- 元吉死時年二十四，有五子，梁郡王承業，漁陽王承鸞，普安王承曉，江夏王承裕，義陽王承度，並坐誅，尋詔絕建成，元吉屬籍，太宗踐祚，追封元吉為海陵郡王，諡曰刺，以禮改葬，貞觀十六年，又追封巢王，諡如故，復以曹王明為元吉後。（『舊唐書』卷64，巢王元吉傳）
- 37) 王連龍「跋唐隱太子李建成及妃鄭觀音墓誌」（『吉林師範大學學報』2014年第3期，47-50頁）を参照，賈二強「釋唐李建成及妃鄭觀音墓誌」（『唐史論叢』第18期，2014年，229-236頁）には「高陽原」の位置が説明されている，「唐高陽鄉為今西安市長安區郭杜鎮，高陽原在今鎮之西南方（唐の高陽鄉は現在の西安市長安区郭杜鎮であり，高陽原が当鎮の西南方にある。）」（230頁），なお，墓誌においては，「大唐故息隱王墓誌」の「隱」字が改刻された痕跡があると指摘されている（230頁），『唐會要』に隱太子の諡号に関する史料が載っている，「貞觀二年三月，有司奏諡息王為戾，上令改諡，議，杜淹奏改為靈，又不許，乃諡曰隱。」（『唐會要』卷80「諡法下」），墓誌と『唐會要』の史料を参考にすると，「隱」字は刻まれた元諡号を改刻したことがわかると，当論文も指摘している（230頁）。
- 38) 尚民傑「長安城郊皇室墓及相關問題」（『唐研究』第9卷所収，2003年）参照，尚民傑氏が指摘するように，高祖皇帝の二十一人の子供の内（大

宗以外）十四人が「獻陵」で陪葬された，ほかの七人は，建成と元吉以外，三子の衛王玄霸が早世し並陽で葬られた，元方も早世して，葬地不明である，他の三人は賜死したり殺されたりしたが，こちらも葬地不明である（418頁），しかし，このように皇子や功臣が帝陵で陪葬される制度は政治と経済が原因で玄宗朝以降消えていたとも指摘されている（422頁）。

- 39) Jack W. Chen の著作 *The Poetics of Sovereignty: On Emperor Taizong of the Tang Dynasty*. (Cambridge, MA: Harvard Asia Center, 2010) 第七章の題目は，On "The Imperial Capital Poems": Ritual Sovereignty and Imperial Askēsis であり，Askēsis とは「禁慾」を指す，なお，『唐詩觀濶集』においては「曲終奏雅」が「帝京篇」の第十首に対する評語となる，陳伯海主編『唐詩彙評上』（浙江教育出版社，1995年，3頁）を参照，「曲終奏雅」の出典は，「揚雄以為靡麗之賦，勸百而風一，猶騁鄭衛之聲，曲終而奏雅，不已戲乎。」（『漢書』卷五十七，司馬相如傳。）
- 40) 前掲註4，第三章「帝王身分下的詩歌觀點」が参考になる。
- 41) 吳兢撰，謝保成集校『貞觀政要集校』（北京中華書局，2003年）卷七「論文史」第二十八，387頁，訓読の部分は新釈漢文大系96『貞觀政要下』（明治書院，1979年，561頁）を参照。
- 42) 貞觀の世では，朝廷では封禪の儀についての議論が始終行われていた，太宗にも封禪の儀を行おうという意欲はあったが，最後まで行わなかった，貞觀の世における朝廷と太宗の封禪の儀に関する議論，及び最終的に行わなかった原因については，何平立『巡狩與封禪：封建政治的文化軌迹』（齊魯書社，2003年，321-332頁）が参考になる。

The Space of the Emperor—On the Imperial Capital Poems of Tang Taizong

Ling-yun CHANG

Graduate School of Human and Environmental Studies,
Kyoto University, Kyoto 606-8501 Japan

Summary This paper focuses on Tang Taizong's Dijingpian (Imperial Capital Poems), discusses the allusion of the poems and explores the deeper meaning of the contents. The series of the poems "Dijingpian" not only described the palace and the activities of the emperor, but also conveyed moralization and teaching in ideal in the ending section. These poems depicted the "space" in which the emperor lived, starting from the palace routines, and ending with a yearning for Fengshan ceremony. In such power space, Tang Taizong's Dijingpian displays the performance and the prospect by an emperor, who was conscious of being a "monarch", which means he attempted to state his ambition in the backdrop where he was in. Such ambition and life in the palace can only be experienced by those with the emperor status, thus it is in concord with the title "Dijing", which means the capital of emperor.